

経済協力開発機構(OECD)は世界65カ国・地域の約47万人(15歳)が参加した学習到達度調査結果を発表した。この調査は3年ごとに行われており、今回は2009年のものだ。日本は2000年の順位には追いつかないものの、2006年まで下降していた数学的应用力、科学的应用力、読解力が回復していることが分かった。

例えば、数学的应用力は9位(00年1位、06年10位)、科学的应用力は5位(00年2位、06年6位)、読解力が8位(00年8位、06年15位)。それ以外でも全科目で順位を上げている。

元氣をつくる マネジメント力

⑥

だが、主要科目でアジア諸国、特に上海(国として参加していない)は首を回している。例えばディベートの授業では「社員の中に指示待ち症候群が増えた」とよく聞かれる。社会に出るまでの教育、そして社会に出てから「熟考・評価」は9位グループに分けディベートの教育の体制の見直しが必要だ。島、そして日本においては経済立て直しにはグローバルな視点に立った教育が必要となってくる。それを実践しているのはユニクロで有名なファーストリテイリングである。組織と人材を国際化するため、3〜5年後をめどに900人の店長を海外に派遣する。

グローバル教育

にとどまり、OECD平均63・3%に対し日本は61・3%と低い。これは、日本の教育がまだまだ記憶型であることを示しているのではない。学習手法も海外では問題解決型手法(PBL)を取り入れられ、グループを二つにわけ、最後は第三者がどちらのグループが論理的であるかを総合判断する。これをみると08年からマイナス成長になっている。今年はプラス成長になると言われているが、中国、インドは高い成長率を続けている。人口が減少している徳島、そして一橋大学では、海外各国の大学と連携し国際的な経営者コースを設け教育を行っている。グローバルに成長するための教育体制の充実である。今後、徳島でも問題解決型教育の実践が産官を挙げて必要ではないだろうか。(森川 富昭・徳島大学病院情報センター部長) 11 随時掲載